

ドクターからの 健康アドバイス

あごかんせつしょう 「顎関節症について」



市立田沢湖病院歯科診療所
所長 平野 俊秀 医師

今回のテーマは顎関節症です。顎関節症という病気は、先日NHKの「ためしてガッテン」という番組でも取り上げられましたが、私も大変興味があったので、その番組を見たのですが、とても納得できる内容ではありませんでした。臨床的にも難しい病気で原因も以前からいくつか上げられていましたが、疑問の残るところでした。私も以前は顎関節症は専門の科、口腔外科で治療するものと思っていましたが、長い経験を重ねていくうちに特別重症なもの以外は日常の歯科治療でも治療できる事が分かってきました。そこで今回は私の治療経験からお話したいと思います。

●顎関節症の症状

一番多い症状は、口の開閉時に顎関節部（両耳の少し前方）で音がする事ですが、それだけで来院する人はあまりいません。それに伴い痛みがある時や口が開けずらくなった時、下顎の動きが異常な時に来院します。

一番重症だった患者さんは口が開かず顔面に激痛が走り、歯科医院、整形外科、耳鼻科とどこでも何か分からず私の所に来たのですが、顎関節症と診断しただけでその患者さんが安心したのを覚えています。また、無症状に経過して、口が普通の人的一半も開かない状態の人もいました。一度口を大きく開けて人並みに開くか試してみてください。

●顎関節症の原因

一番の原因は咬み合わせです。特に機能的な咬み合わせに障害があると筋肉にストレスがたまって顎関節症が起きてくるようです。

普通、「咬み合わせ」とは単に口を閉じた状態の事を言いますが、下顎は上下に開閉するだけでなく前後左右にもスライドして動きます。その動きを今回説明しやすい言葉として「機能的な咬み合わせ」と表現します。

その機能的な咬み合わせの障害を起こす主な原因を3つに分けてみました。

（1）歯科治療によるもの

歯に金属を被せたり詰めたりした物の咬み合わせが高かったり機能的な動きに問題があった場合です。

最近は取り外しの入れ歯も人工歯が堅くなった為に、機能的な動きに問題があった場合顎関節症の原因になります。

また、矯正治療でも歯並びは美しくなっても機能的な咬み合わせに問題があると顎関節症が起きてきます。

（2）歯を抜いたままにしていた場合

歯を抜いたままにしていると隣の歯が倒れ込んだり、

反対側の歯がせり出して歯列の咬み合わせの面が凸凹になってしまい機能的な動きができなくなります。

（3）最初から歯並びが悪い場合

特に上の前歯の真ん中から2番目の歯が内側に生えている場合、機能的な動きが妨げられます。また親知らずが生えてきた為に、良かった歯並びが乱された症例もいくつか経験しています。

以上のような原因を持っていても顎関節症の症状が必ず出るものでもなく、その症状が現れる場合も、早い人は数日で現れますし、私の場合は15年程経ってから口が開きづらくなり自分で障害となっている部分を削って調整し、すぐに治りました。私の場合は顎関節の音はありませんでした。

●治療

治療は模型上で機能的な咬み合わせの障害となっている部分を探します。それから咬み合わせの調整をして機能的な咬み合わせを与えてあげる事です。経過が短い程早く治るようですが、全てが簡単に治るわけではありません。

歯科治療が原因となっている場合よりも歯並びが悪い天然歯の方が治療は難しいと思います。

歯科治療が原因の顎関節症で治療が思ったように効果が現れなかった患者さんの場合、最終的に奥の歯を全て柔らかめの金属で自然に咬み合わせが調整できるように変えたら、食事中に咬む度に周囲に聞こえていた音も全くしなくなりました。模型上でのチェックの限界を感じました。前記した矯正治療した患者さんの場合、口の開閉時に目の少し外側が異様に盛り上がるので顎関節の機能異常がすぐ分かりました。肩こりがひどく、通院していましたが、咬み合わせの治療で顎関節も肩こりも治ってきています。歯科治療後に気持ちが暗くなったという患者さんも模型で調べてみると機能的な咬み合わせは全く無く下顎は上下に開閉するだけでした。もちろん機能的な咬み合わせを考えて治療したのですが、気持ちも元のように明るくなりました。顎の自由な動きを押さえ込まれる事はかなりのストレスのようです。

●まとめ

脳研の鈴木先生から時々原因不明の頭痛の患者さんを依頼されるのですが、不明な原因が歯科の場合が殆どでした。歯科治療で顎関節症になったり、更に重症な肩こりになったり、性格を変えてしまったり、頭痛の原因を作ったりする場合があります。我々歯科医は歯と全身の関係をもっと勉強する必要があると思っています。